

顕彰状

村上春樹氏は1949年1月12日京都府京都市に生まれた。兵庫県立神戸高等学校に進学後、1968年に早稲田大学第一文学部に入学すると演劇専修に進み、1975年に卒業した。

在学中、東京国分寺にジャズ喫茶「ピーター・キャット」を開業した。週末には生演奏も行った同店の存在が、村上氏の人生に与えた影響は大きい。1979年、文芸誌『群像』に応募した『風の歌を聴け』が第22回群像新入文学賞を受賞した。1981年には『マイ・ロスト・シティー——フィッツジェラルド作品集』で翻訳家としての才覚も示した。1982年に『羊をめぐる冒険』で第4回野間文芸新人賞に輝くと、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）で第21回谷崎潤一郎賞を受賞。1986年にヨーロッパに拠点を移すと、翌年刊行の『ノルウェイの森』（1987）が世界的な好評を博することになった。

この頃から、村上文学は海外でも注目を浴びるようになった。1989年、アルフレッド・バーンバウムの手により『羊をめぐる冒険』が英訳・出版されると、1990年アメリカを代表する文芸誌『ザ・ニューヨーカー』が短編「TVピープル」を掲載した。これを機に同誌には多くの短編が掲載されることになり、英語圏での村上文学への注目度が一気に高まった。

代表作のひとつ『海辺のカフカ』（2002）はフィリップ・ガブリエルにより英訳され、『ニューヨーク・タイムズ』が選ぶ2005年「ベスト10冊」に選ばれた。2006年にはフランツ・カフカ賞、フランク・オコナー国際短編賞を受賞。2009年にはエルサレム賞を受賞し、その受賞メッセージが話題となった。その後も村上氏の創作熱は衰えず、2023年出版の小説『街とその不確かな壁』へと至ることになった。

学術的には、1991年に米プリンストン大学に客員研究員として招聘されると、翌年からは客員講師として現代日本文学の授業を担当した。2008年には、プリンストン大学から名誉学位が授けられた。

40年以上に及ぶキャリアのなかで、村上氏が著した短編小説、ならびにそれを編纂した短編集は数多い。また、フィッツジェラルド、サリンジャー、カーヴァー、オブライエンらアメリカ作家を訳出した翻訳小説が、日本の文壇に与えた影響も計りしれない。

村上文学の特徴はコスモポリタンな空気と、現実世界と幻想世界を縦横無尽に結ぶ自由奔放な作風にある。また、村上氏が伝統的な日本文学の素養を持ちながらも、自らが多くの翻訳を手がけるモダニズム以降のアメリカ文学から受けた影響も見逃せない。加えて、ジャズを中心とする音楽への造詣の深さが、作品に深みを与えてきた。

作家のみならず、内外の芸術家にも多くの影響を与えた村上氏の小説は、何度か映像化されてきた。デビュー作『風の歌を聴け』は1981年に大森一樹監督により映画化された。トラン・アン・ユン監督による、2010年公開の『ノルウェイの森』は世界的な評価も高く、複数の映画賞を受賞した。また2021年には、濱口竜介の監督作品である『ドライブ・マイ・カー』が、カンヌ、シカゴといった国際映画祭で高い評価を得た。

近年、創作以外でも多様な活動を展開する村上氏は、のちに「村上さんのところ」として書籍化されることになった期間限定(2015)のウェブサイトを開設したことに加え、2018年からは「村上RAD I O」にてディスクジョッキーを務めている。また、本学国際文学館（村上春樹ライブラリー）開設（2021）においては、貴重資料の寄託・寄贈に合意されたのに加え、日頃からその活動に積極的に関わってこられた。

以上、村上氏は日本のみならず世界の小説家として、多大なる影響を文化・芸術分野を中心に与えてきた。本学においても国際文学館を舞台に文化・文学の発展に大きく寄与されており、今後本学が世界に冠する研究機関として発展していくにあたり欠くことのできない存在である。名誉博士の贈呈は、村上氏のこれまでの業績を正當に評価するものであり、誠に時宜にかなっているというべきである。

ここに早稲田大学は、村上春樹氏に

名誉博士（Honorary Doctor of Letters）の学位を贈ることとした。

学問の府に栄えあれ！

大学が栄誉を与えんとする者を讃えよ！

(*Vivat universitas scientiarum! Laudate quem universitas honorabit!*)